



筑紫女学園大学リポジット

A Study of Position and Epochal Significance of "Homecoming Literature" in Taiwanese Society

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/161

台湾社会における「探親文学」の位置づけと 時代的意義についての一考察

石 其 琳

A Study of Position and Epochal Significance of
“Homecoming Literature” in Taiwanese Society

Kirin SEKI

前 言

2008年3月台湾社会において、重要な政治行事である総統選挙の結果により、2000年から続いた民進党政権から国民党が政権を奪還したが、当選した馬氏自身も国民党世代交代の代表であり、国民党の政治理念と対中政策も半世紀前と大きく様変わりしたことは事実である。この半世紀の道のりから、国民党政権は独立を掲げないが、台湾社会に根を下ろす方針を定着させたこと、すなわち定着させざるを得なかったことは明らかである。概念的に台湾社会の住民意識はこの半世紀かなりの変化が見られ、今後の台湾社会は政治経済を中心に多方面において、新しい道へと歩み始めるのは必然である。

ここでは現在の政治情勢、住民意識と異なり、台湾社会における一般的政治理念と中国政府と台湾の関係がまだ緊張感極まる時期に起こったある文学現象に注目したい。なぜならその現象が台湾社会において、重要な意味持つだけにとどまらず、ここ半世紀における中国大陸と台湾の関係に大きな歴史的価値があると考えたからである。この文学現象というのは、台湾文学が多元化へ展開される潮流の中、新たなジャンルとして成立された「探親文学」である。

そもそも「探親」の意味は、離れている家族親類のところへ訪ね会う行為だと考えるのが普通であるが、ここで言う「探親」は、一般の人情によるものではない。そして新たなジャンルとして成立された「探親文学」において、ある特別な歴史背景から生じたのであり、そのテーマに関わる「探親」行為を行うだけで並大抵なことではない事実にも注目せねばならない。台湾社会において、戦後国共内戦によって、中国大陸から移住した人々が、大陸への帰郷活動を行い、その特別な情緒を抱いて創作された作品群が「探親文学」と名づけられたのである。本論はこれらの「探親文学」の範疇にある作品のなかから、更にある特徴をもった作品をとりあげ、「探親文学」の台湾社会における特別な位置づけを確認し、作品に潜む重要な時代的意義を明らかにしたいと考える。

第一章 「探親文学」形成の理由背景

この章は、現代台湾文学史に「探親文学」と言うジャンルが発生から成立に至るまでの過程と展開について、その背後に存在する重要な政治的背景を踏まえながら、検討する。

(1) 「探親政策」成立の政治背景

ここでまず「探親文学」の発生に欠かせない重要な政治的背景要素である「探親政策」の成立について、簡単に説明をしておきたい。

1980年代頃、台湾の国際社会における立場が厳しく変動する中、中国大陆と台湾との接点を双方の政権の意識変化によって、合理化されつつあるのは事実である。結果、台湾社会内部の住民意識の潮流にも変化が見られ、政治政策を動かす重要な動力になり、最終的に探親政策の成立に繋がったのである。

当時台湾政権の国民党政府に、時代潮流に沿って顕著な変化が見られたのは、1986年9月28日、民主進歩党が成立されたことである。この事実が約40年間一党独裁を続けた国民党に容認されたことだと考えられる。この画期的な政治事件の波紋は、一連の政治政策にも影響したことは言うまでもないであろう。野党民進党成立後の同年10月15日国民党中常会で、40年続いた施政上の「戒厳令」の解除を決定し、同時に党禁（野党が存在を認めない）も解除されたのである。当時の総統蔣経国は国民党中常会で「時代は変わっている、環境が変わっている、潮流も変わっている。」と一連の戒厳令の解除理由として、以上のような内容を提示したのである。国民党政府は、政治方針と政策の方向を見直しながら、中国大陆との関係を新たな段階へと進展させねばならないと覚悟したであろう。1987年7月15日零時より、画期的に戒厳令が解除されたのである。

この戒厳令の解除は、政治政策にとって新たな段階へと歩み始めると同時に、対外的経済政策も改めなければならなかったである。当時経済の面ではアメリカ依存度の高かった台湾は、アメリカ経済情勢の悪化により、自国貿易保護政策が強化され、そのしわ寄せで台湾経済へ圧力をかけられ、台湾元の値上がりを強いられ、外国為替の制限も解除せざるを得なかったのである。この情勢から、台湾はその経済方針を大きく変動させ、新たな市場開発を求めなければならなかったのである。その適切な場所として、これまで敵対していた中国大陆が市場開放政策を打ち出し始め、台湾経済の生き残りに格好の場を提供できると考えたのである。よって、政治だけではなく、経済効果を考量しても、これまでの壁を突破しなければならなかったであろう。このような背景により、1987年10月15日台湾政府行政院は、台湾住民の大陸への探親（里帰り）開放政策を通過させたのである。

探親政策の成立後、台湾当局は正式に政策を行う前に、効率よく民間機関が実際の業務を早く着手できるよう、1989年11月2日赤十字会総会は探親登録を受理し始めたのである。これがいわゆる正式に「政府の承認」のもとで行われた台湾住民の大陸へ探親活動（里帰り）の始まりである。だが、政策が成立したものの、全ての身分において、すぐに帰郷が許されたわけではないのも事実である。特に軍人と公務員関係者にとっての帰郷はもう少しの時間が必要だったのである。この点に

関しては、本論が検討する内容と深く関わる重要なポイントが含まれていることに注目する。

(2) 「探親文学」の発生と展開

上述の説明から、台湾当局が正式に住民の大陸への里帰りを許可したのは、実に1949年以来のでき事である。国共内戦を理由に、国民党政府に追隨して台湾へ移住した人々は、これまで約40年間の政治的敵対的関係が続いた背景のなか、中国大陆と台湾両地で生き別れた親族間の往来が、完全に禁止遮断されていたのである。それだけではない、手紙などの連絡方法さえも許されなかったため、全く音信不通の状況が続いたのが実態である。

1989年の探親政策成立後、別れ離れの家族親類は、約40年間の空白を埋める機会をもちたされたのである。台湾からの人々は、約40年ぶりの里帰りが実現され、一時期ブームになったほど盛んになった。長い年月をえて生き別れた家族と対面することは、人間にとって月並みなことではないのは当然であろう。故郷の人事に対して深く感懐すると同時に、一方では、長期における共産党政権支配下の故郷の変化には、驚きを隠せないほど受けた衝撃は大きかったのも事実であろう。そのさまざま貴重な経験が、多くの「帰郷記」として作家または一般人によって創作され、新聞、雑誌などにおいて発表されたのである。その創作風潮が高まったなか、当時の大手新聞「中央日報」、「中国時報」のほかに、大手出版社「皇冠雜誌社」などからは「探親文学」と言うテーマの「文学賞」までが設置されたのである。多くの帰郷文学作品のコンクールが行われたため、社会にこのテーマに関しての創作意欲を引き起こしたのも事実である。

80年代の台湾文壇では、それまでの現代派と郷土派の主導的地位が揺るぎ、社会全体も多元的意識が強くなる傾向が顕著化されたのである。そのような風潮が展開される中、文学界にも多様な新ジャンルが生まれ、文壇をにぎわせたのである。例えば「政治小説」、「都市文学」、「新現代女性文学」などが芽生えながら確定されたのである。「探親文学」もこの時代の波に乗って、更に有名作家の手によって多くの作品が創作されたことで、一時的にブームの展開に拍車がかかったように、文学の多元化に一役を担ったのである。そして台湾政治社会に密接に関係するこれらの作品は、そのテーマの性格の特徴性から「探親文学」というジャンルが定義され、文学史においてもそれなりの位置づけが確定されたのである。

第二章 「探親文学」の共通的概念と特徴

「探親文学」がジャンルとして台湾社会において定着できたのは、上述した大陸への帰郷活動が台湾当局の開放政策によって、盛んに行われたためであり、実際に帰郷した経験を持つ作家もこのようなテーマの作品を多く創作し、一時的ブームの展開につながったことが一つ重要な理由であると考えられる。

ここで「探親文学」が持つ共通的概念と特徴について理解するため、まず具体的に高名な詩人非馬氏の「探親」をテーマにした詩作（羅湖駅）を取り上げてみたい。この作品の内容を検討するこ

とにより、作家自身の人生背景が明らかにされ、一般にいわれる「探親文学」の概念、更に創作する作家と作品が持つ共通的特徴と情緒が理解できるのではないかと考える。

(一) 作品「羅湖駅」のテーマと内容について

作品「羅湖駅」は、1981年作家非馬が創作した現代詩である。ここで先ず詩の内容を紹介しながら解説を加えたい。

私は知っている	彼女は私の母親ではない
私の母親は	澄海城にいるのだ
十時間まえ	私は彼女と涙ながらの別れをした
しかし	この手に荷物を提げているおばあさんは
本当に	私の母にそっくりだ

私は知っている	彼は私の父親ではない
私の父親は	台北にいるのだ
近いうちに	私は彼に会いに行く
しかし	この杖を持った老人は
本当に	私の父親にそっくりだ

彼らはプラットホームで出会った
互いに目をあわしたが
やはり知り合いではなかったのだ

生き別れて30年	私の母親は手荷物を提げて
プラットホームで	杖を持った父親と出会った
互いに目線を合わせたが	
悲しいことに	彼らは相手に気づかなかったのだ

この詩の題名である「羅湖駅」は、香港新界の北区に位置する駅である。鉄道東鉄線の終着駅で、香港から陸上で中国広東省深圳市へと繋ぐ重要な関門口である。出入りする際、乗客に対して厳しい手続きが多く課されるが、2005年この駅の利用者は8600万人を超え、世界でもっとも忙しい出入国駅だと言われている。さらに「羅湖駅」には、時代的に、実際この詩に描写された生き別れの人々が、30年後の再会の際、よく利用される重要な場所でもあったのだ。このような重要な歴史背景の役割を担ったため、作者は詩の舞台をここに設定し、詩のタイトルを「羅湖駅」と考えたのである。

1976年台湾当局が部分的にとった大陸への帰郷政策の開放後、戦後大陸から台湾へ政治的理由で

移住した人々により帰郷ブームが起こったのである。しかしこの詩が描写しているように、実際に家族、夫婦が生き別れて30年以上も経てば、互いに年をとり、出会っても相手を気づかない悲しい現実が存在することも相違ないのである。この詩に現れた現実が、「探親文学」に共通する典型的な悲情の構図であると考えられよう。故郷は、30年以上も経てば、人と事の変動が大きいのは当然である。だが最も悲しいのは、30年以上も経った後、やっと帰郷できる状況に押し入れられたのは、外的理由であり、本人たちの意思ではなかったことである。この点について理解するため、この作品の創作者、非馬の人生背景を考察する。

(二) 作家「非馬」の人生背景と「探親文学」の関わりについて

詩人非馬は本籍が広東省である。1936年台湾台中市に生まれた後、家族と共に大陸へ渡り、12歳まで広東省で過ごしたのである。1948年父親に付いて来台し、台湾の学校に入学し教育を台湾で受ける。1961年アメリカへ留学する。機械エンジンニアリング修士と核学エンジンニアリング博士学位を取得した後、アメリカ国家研究機関に勤めて、シカゴに定住して20年以上経ったのである。非馬は科学者ではあるが、1950年代から既に詩を創作しはじめ、作品の大半が台湾で発表されている。よって1978年、1982年の2回台湾「吳濁流文学賞」の新詩部門を受賞したほか、《笠》詩刊社第2回翻訳部門賞と第3回創作賞を受賞したのである。有名な作家であるため、彼についての研究も多数見られる。彼が文学界で注目される一つ重要な理由は、彼の人生背景の要素が潜在的に創作内容に大きく影響を与えたうえ、作品に重要な時代的特色が現れているからと考える。

非馬の作品内容の多くは、常に台湾と大陸両海岸の長期政治分裂の狭間に徘徊しながら歩み続けている。この特色について、彼の人生の背景を検視すれば、典型的な「探親文学」の悲情構図に深く関わる要素が含まれていることが明らかである。彼自身を含めて、家族全員が台湾、中国大陸とアメリカの三地域に分散しているという現実的背景がある。当然アメリカへ行ったのは自分自身の理由ではあるが、しかし台湾と大陸に分かれてしまった両親は、政治的理由によるものであることが明白である。非馬は自分自身の経験を踏まえ、1970年代から、厳しい歴史的現実理由をもとに喚起された故郷、国への感懐と愛情を詠える作品を多く創作したのである。

台湾当局が正式に探親開放政策を成立させる前、台湾での国民党政権と大陸の中華人民共和国政権が敵対的立場になっており、一般の台湾在住で本籍が大陸の人々、いわゆる「外省人」が帰郷する合法的権利を持たない状況の中、海外に住む親族または友人に頼んで、第三地域（中国大陸と台湾以外の地域）を通じて、中国大陸の故郷の家族へ手紙を送り、または自分たちの代わりに帰郷してもらうことによって、故郷にいる家族の消息を得られるというさまざまなルートを考えて、密かに連絡できる方法を取っている。非馬もこのような時代に生きた故、自分が父親と台湾へ渡った後、政治的情勢の変動で、台湾と大陸が行き来できなくなってしまったのである。台湾で商業に従事している父と、広東省の実家に残された母親とが数十年にわたり生き別れを強いられてしまったのである。当時の台湾社会において、彼のような家庭事情をもつ住民が多数いるのは事実である。

非馬にとってはアメリカに居住し、公民権を取得しているため、アメリカと中国が国交回復した

後には自由に中国大陸への出入りができるようになったのである。そこで彼は数十年経って、年々老いていく両親のため、常に父親と母親が住む台湾と大陸へ行き来し、互いの状況報告をしつづけたのである。1981年彼は香港の辺境地である「羅湖駅」を訪れた時、両海岸において、当時でも親族のもとに帰るため、この駅を自由に出入りできない人々の悲しい苦痛を感嘆してこの詩（羅湖駅）を創作したのである。この詩に描写された情緒は決して幻想的なものではない。中国現代史において、歴史的現実と反省と意義をもたらす作品だと考えられる。そして、この作品が描写された社会的現実と感情表現は、台湾社会において、一般にいわゆる「探親文学」のテーマと時代の特徴性が十分に表現され、ある意味では、もっとも典型的な作品であると言える。

第三章 「探親文学」作品の時代的意義

上述の作品（羅湖駅）を通して、「探親文学」のテーマ内容と創作者の身分背景に存在する共通理念と特徴性が明らかになったであろう。本章は、更に五作品を取り上げ、「探親文学」が持つ一般的特徴性の他、更に中国と台湾関係における時代的意義と重要な位置づけを検討する。

(一) 五作品を取り上げる理由

ここでまずこの五作品を選んだ理由について、説明する必要がある。

前章において、「探親文学」の一般性に、作品の内容と作家の生涯背景に共通する特徴が明らかになったが、これから取り上げる作品について、内容的に台湾文学作品のジャンルとして、普通に見られる「探親文学」であることには相違ないであると同時に、一般的意味の「探親文学」の性格と異なる点が存在するのである。そしてこの相違点は、特にこの半世紀以来、台湾の社会意識の変化過程と深くかわり、さらに中国大陸との関係を重要視せねばならない問題点が含まれている。では、以下この五作品を取り上げた特別な理由を説明する。

理由その1：この五作品は、特別な作家の手を経たものではなく、すべて台湾の大手新聞「中国時報」が1987年「探親文学」を特集のテーマとして、公募活動を通じて集めた一般人の作品である。

理由その2：五作品の作者の身分背景について、ある特徴が見られることに、注目せねばならないと考える。

理由その3：この五作品は、ある共通点を持っている。この共通点が存在する故に、五作品は、上述した一般の「探親文学」の内容と情緒表現が異なるのである。その共通点というのは、この五作品の作者らが大陸へ帰郷する「時期」について、彼ら全員同様、台湾政府の「探親開放政策」が正式に実施される前に、密かにそれぞれのルートで帰郷活動を行ったことである。要するに、中国大陸への帰郷時期が一般より早かった点に注目すべきである。

以上3つの理由から、これらの作品に存在する特別な時代的意義が見受けられると考える。この点に関して、個別に作品を考察する。だが、作品を検討する前に、まず台湾社会に「探親文学」の

創作ブームを高めた背景に、五作品と深く関わる「探親文学特集」の重要な位置づけと時代的意義について考える。

(二) 「探親文学特集」の位置づけと時代的意義

上述で提示した理由その1に関連して、五作品を登載した「中国時報」の「探親文学特集」が持つ重要な位置づけと時代性について検討する。

当初台湾当局の探親開放政策が正式に実施されてから、しばらくは台湾社会に帰郷ブームが巻き起こったのは事実である。その一時的盛んな風潮の中、有名作家たちも自分の帰郷経験を作品として、さまざまな場で発表するようになったのである。作品の内容については、生き別れた親族との再会について多く語られたのは当然であるが、中には帰郷の際、家族と懐かしく名勝地での遊記などの文章も多く見られたのである。このような作品は、長い間台湾に住む一般住民たちにとって、これまで足踏みできない禁地である中国大陆の社会実態、自然風景についての描写は、新鮮で興味深いものが多く感じられたに違いないであろう。そこで、各大手新聞社または出版社は、「探親文学特集」として、作品を募集し始め、中には「探親文学賞」を設け、作品創作コンクールを行ったところも多く見られたのである。台湾社会にとって、この創作ブームは、この半世紀にわたって、政治的理由から特別な時代によって生まれた一風変わった社会的現象であり、現代史においては、住民心態を示唆していると思われる。また台湾文学史においても、意識形態と深く関わる重要な歴史事件であると考えられる。

次は本論が取り上げる作品の発表背景について説明する。作品が登載された台湾の大手新聞「中国時報」は、帰郷風潮が盛んな時期の1987年中、その新聞の副刊「人間版」において「探親文学特集」が企画されたのである。「中国時報」「人間版」の編集担当者がこの特集について、その企画の趣旨を以下のように明記している。

（回到大陸的那一天）（大陸に帰った日）の特集は、（離開大陸的那一天）（大陸から離れた日）の特集の続きである。同時に中国時報（人間副刊）において、「探親文学」のテーマを中心として企画された第2部分である。今回は一般の人の帰郷経験を綴った作品を登載する予定である。彼らの作品には、政治的評論ではなく、学術的な観点も含めないが、ただ平実な観察を記録し、個人的素朴な感覚を語っているのである。したがって、彼らの誠実な報道は、私たちにとって、40年も離れてよそよそしくなった故郷について、新たに知るための意義ある資料であると考えられよう。

故郷の家にはどっちみち帰らなければならないであろう。私たち或いは私たちの親と先祖は、かつて彼の地で生まれ育ち、故郷または家族のために血と涙を流したであろう。万障を越えて、傾き崩れた故郷を立て直すことは家族全員の責任でもあろう。

家（故郷）は、常に顧みるべきものであり。一個人がそうであると考えますが、一民族もそうであるべきだ。

編集者

以上探親文学特集の冒頭にある提要の内容から、今回集めた作品の真実性について、その社会的
位置づけと意義はきわめて重要視せねばならないであろう。本論は特にその点に注目し、作品を取
り上げる重要な理由として考えたのである。次章からは、五作品の内容を取り上げながら、それぞ
れが含む重要な問題点について検討する。

第四章 作品の内容から見る問題点

この章は、「中国時報」に「探親文学特集」として登載された五作品を取り上げながら、作品の
台湾社会における重要な位置づけと問題点を考察する。ここで先ず五作品の情報について、タイト
ル、作者、作者の帰郷時期、作者が帰郷当時の身分と作品が登載された日付について、簡単に説明
する。

一 作品の情報について

作品：「來時路」(来たみち)

作者：鄧海波 本籍：湖南省湘郷県
帰郷時期：1987年7月 帰郷当時の身分：商人
登載日：1987年10月26日

作品：「南柯一夢」(ぬかよるこび)

作者：程泰 本籍：河南省鄭州県
帰郷時期：1986年6月 帰郷当時の身分：軍眷(軍人配偶者)
登載日：1987年10月27日

作品：「帰郷」

作者：林秀清 本籍：江蘇省丹陽県
帰郷時期：1987年8月 帰郷当時身分：軍眷(軍人配偶者)
登載日：1987年10月28日

作品：「一份新希望」(新たな希望)

作者：王威 本籍：四川省重慶
帰郷時期：1987年 帰郷当時身分：記者
登載日：1987年10月29日

作品：「傷情舊事驚歸夢」(悲しき帰郷の夢)

作者：劉永徳 本籍：安徽省合肥県
帰郷時期：1983年4月 帰郷当時身分：退役軍人
登載日：1987年10月30日

以下は五作品の内容から、第三章の理由2と3に深く関係する問題点を考察する。

二 帰郷時期に関わる諸問題

これら作品の作者たちの帰郷時期は、1983年から1987年である。この時期において、当然台湾当局の正式の探親政策が実施される前である。よって彼らは、全員何らかの形で、秘密裡に非法な帰郷を実現させているのである。そして「特別な時期」であるだけに、特別視せねばならない問題も多く存在している。この点に関して、作品の内容を具体的に触れながら検討したい。

(1) 帰郷を考えるきっかけ

5人の作者が帰郷時期を急いだ理由を考える場合、まず触れるべき問題点がある。それはなぜ彼らは政府から厳しく禁じられた帰郷行動を実行したいと考えたのだろうか。実は、五作品の作者にとって、帰郷する意志が芽生えたきっかけは、意外にも共通した理由背景が存在したのである。この点について、作品の内容から具体的に触れたい。

「私の実家は河南省鄭州です。私は都市生まれで、主人は鄭州の田舎育ちです。彼は軍学校卒業後兵隊に入り、抗日戦争の終了後、河南省に戻り私と結婚したのです。1948年軍の撤退が始まり、主人は私と母親と長男を連れ、家を離れました。河南省からずっと南の上海で船を乗り、1949年6月に台湾へ到着しました。当時私は27歳でした。その後5人の子供に恵まれ、末子も32歳になって、孫までできました。

歳月が過ぎ去るのは早く、それまで故郷との連絡はとれなかったため、故郷に対する思いもそれほど強くは感じなかったのです。なぜなら台湾にいる家族も多く、10年前には姑さんが他界したばかりでした。実際故郷を思ったところで帰れないし、これまで数十年も無事に過ごしてきたのですから。

1980年、私はアメリカにいる長女を通じて、故郷の実家へ手紙を出してみました。やや暫くたって返事が来ました。それから連絡を取ればとるほど帰郷したい気持ちがたかまったのです。ここ数年多くの人が帰郷したという噂を聞いて、自分も冒険してでも一度帰郷すべきだと考えました。私はもう年で、体もよくないし、元気なうちに帰らないと一生帰れないのではないかと思ったのです。」

この内容によれば、作者の鄭氏は、台湾へ移住して以来、新しい家族も増え、安定した生活が続く故郷の家族に対する思いは、互いの交流が厳しく禁止されていたから、帰郷の念は既に諦めがついたであろう。しかしアメリカにいる娘を経由して故郷との連絡がとれてから、故郷に対する懐かしい思いがどんどん膨らんで、結局危険を負ってまで帰郷する気持ちが固まったと述べている。

実際五作品のうち、作品の鄧氏もアメリカにいる従姉妹を通じて、故郷の実家に手紙を出して、やっと家族と連絡が取れ、故郷の家族の健在を確認して帰郷する意志を固めたのである。ほかには作品の林氏が香港にいる友人を通じて家族との連絡を実現させ、作品の王氏はアメリカにいる友人を通じて、実家との連絡が取れたのである。この実態は、当時台湾社会において、表面では禁じられた行為であるが、裏では暗黙の了解を得られたように、多くの人々がそれぞれのルートで故

郷にいる家族と密かに連絡を取っていたのである。この行動はかれらにとって精神的な慰めになったのは否定できないし、後に帰郷したいというきっかけにもなったのは想像を待つまでもない。次は五作品の作者が共通して帰郷する時期を急いだ理由についての問題点を検討する。

(2) 帰郷時期を急いだ理由

作品 の場合、作者自身がいつ、どのように故郷を離れたのかを詳細な記述がある。作者鄧氏の父親は祖父の意志に従い、財産を放棄してキリスト教精神のもとで、山村地帯で病院を設置し、唯一の医者を務めたため、1930年鄧氏は湖南省の山奥に生まれたのである。父の期待に従い、湖南大学に入学した後、政局が不安定なため、父親の希望で広州の中山大学へ転校する事になったが、行く途中、戦乱で避難者の波にさらされ、同級生たちとはぐれてしまった。その後広州では路頭に迷う羽目になり、偶然に広州駅で、国民党政府軍隊の募集広告があったので、家族と相談する時間と余裕が無いなか、そのまま軍隊に入隊したのである。1949年内戦状況が厳しくなり、軍とともに海南島へ移動し、更に1950年台湾へ移動したのである。鄧氏の場合、故郷にいる家族は、自分が台湾へ渡ってしまったことさえ知らないまま、数十年経った状態だったのである。自分が生きているうちに、家族に会って知らせないと、一生悔いが残るであろうという思いが強くにじみ出ている。のちに特別なルートを通じて大陸にいる兄弟と連絡が取れたが、1984年その兄弟も一人が病死し、彼に大きな精神的打撃を与えたのである。一日も早く帰郷して、会いに行かなければ一生会えなくなるのではないかと危機感もつのらせ、探親政策の実施開始を待たずに、帰郷の時期を急いだのである。

作品 の林氏の場合は、1948年内戦が厳しくなったため、軍人である夫の所属の部隊が台湾へ移動するため、両親と泣ながら「心配はしなくていい、台湾行くのは精々一年か二年ぐらいで、私たちはすぐに転勤申請をするから、早い時期にまた会えるようになるのだから…」と言ったきり、再会できるまで約40年かかったのである。台湾社会に林氏、鄧氏同様で、帰郷に対して特別な心境を抱えている「外省人」住民は、ごく普通で大勢いることは事実である。作品内容からは、彼らが法を犯してまで帰郷を実現したいという思いの強さ、またはこの帰郷が彼らの人生において、特別に深刻な意義が存在することも充分理解できて余りある。

(3) 台湾社会で帰郷者側と関わる問題

上述のように彼らは当局の探親政策の実施開始を待たずに帰郷するので、特別に警戒しながら行動するのは当然であろう。作品 の林氏は「私は眷村に長く住んでいるが、村の住民の背景にはたいした相違はない。当初大陸から来て、まさか台湾で長期にとどまることは想像もつかなかった。…今回帰郷したことは、誰にも話していない。近所の方々は私の行動に気づいたかもしれないが、やはりまだ開放政策が正式に実施されていないので、人に知らせるべきではないと考えている。…」と記されてある。さらに作品 の鄧氏は帰郷を決心して、会社に「休暇願書」を出したとき、総経理（社長）は自分の「休暇願書」を持って困惑な表情で「貿易会社は、出入国関係のある税関と常に関わっているので、あなたの帰郷行動がもし外部に知られると、今後会社の業務に影響されると

大変だから、もっと真剣に考えてほしい」と言われたため、会社に迷惑を掛けないように自ら辞職したのである。この事例からも理解できるように、探親政策開放前の帰郷という行為は、それぞれの理由背景に、かなりのリスクを背負わなければならない実態をみることができる。

(4) 帰郷者を受け入れる中国政府側に関する問題

帰郷の時期を急いだことは、帰郷者側だけが問題を抱えているのではない。受け入れ側の大陸当局にとって適切な対応をせねばならないのも事実である。まず帰郷者たちに便宜をはかって、台湾へ無事に帰れるよう密かに彼らを保護しながら、対策を考案しなければならないである。さらにこの帰郷者たちの目と実体験を通して、さまざまな印象を与えながら、台湾との関係に重要な意味をもたらすのは避けられないであろう。この点に関して作品の内容を触れてみたい。

作品の劉氏は帰郷できるまで、数回香港を訪れた経験をもっている。香港へ行く理由は、毎回旅館で大陸の親族へ12通の長い手紙を書き、お金と一緒に送るためであった。当時台湾から直接に通信などの交流は禁じられたのである。劉氏が1983年8回目の香港に行ったとき、偶然に「中国旅行社」の広告資料をもらって、そこが中国大陸当局の代わりに帰郷者の帰郷手続きを代行できる機関であったことを知り、至急に手続きを行い、「帰郷証」を取得し、初めて帰郷できたのである。ここで使用された「帰郷証」とは、大陸への入境記録をパスポートに残さないために、大陸当局の作った「親切的な」対策である。実際、劉氏が「国民党退役軍人の身分で帰郷することは、大変な勇気が必要だ。」と作品に記されている。当時の帰郷は、厳しい「戒厳法」に関わる違法行為のため、さまざまな処罰を受けることは相違ないであろう。特に劉氏ら軍人出身者の場合、政府から受ける終身年金にも影響があると懸念される。このような理由で、開放された直後も帰郷をあきらめた人は少なくないのである。

次はもう一つの重要な問題点に触れてみたい。実際に台湾住民の中、上述5人の作者のように、早い時期の帰郷者は、決して少なくはないのが事実である。大陸側も台湾を「国内同胞」であると主張しながら、帰郷者たちを台湾同胞と呼び（台湾住民に対する好意を示す呼び方である）、彼らが故郷へ、更に共産党政権に対して好印象を与えたいと考えたに違いないであろう。この点について、作品の内容を例に説明を加える。

作品に作者劉氏が始めて上海についた後、合肥県行くため寝台列車に乗った際、台湾から来たと言うことで、服務員が親切に列車長を呼んで、時間外の特別サービスの食事まで受けたのである。それだけではない、列車長が劉氏に話かけた時、劉氏の警戒している様子をうかがって、「あなたは何も気にすることないよ！ たとえ鄧小平馬鹿やろうと言ってもまったく大丈夫ですよ。悪いところがあれば、遠慮なくおしゃってください。」との言動がみられる。この時期は大陸で鄧小平の開放政策理念が広がりつつ、台湾との関係を修復して交流を深めたいという方針が打ち出された時期が背景にあるのである。大陸国内で開放的社会状況を外部へアピールし、イメージアップに力を入れ始めたところである。そこで、帰郷と言う使命感をもつ「台湾同胞」の存在と役割がとても重要だと考えたであろう。実際の帰郷者たちの、実家での滞在時、地方の役所の公安人員が必ず毎日

のようにたずねてくるのが普通であった。歓迎すると同時に監視的任務もあるという中国政府の用心がうかがえ知れよう。この状況は開放して20年も経った今日では、台湾住民に対する配慮はあるものの、実質的には、作品内容と違って、より普通の形で対応できるようになっているのである。特に現在は互いに経済的密接な関係が出来て以来、この特別な時期に見られる懸念も薄くなったのである。中国大陸と台湾関係の過度期において、これら作品によりさまざまな生活の真实的側面が描写し保存されたのである。作品にその時代的意義があることは相違ないであろう。当時の政策に「台湾同胞」に対する印象と対策方針からみれば、今日「台湾同胞」または台湾政府に対する態度は、または大陸一般の庶民が台湾から来た人に対する感覚がかなり大きく変化していると見受けられる。

三 帰郷者身分の特性から見る問題点

さて、第三章理由2に触れたように、五人の作者の帰郷当時の身分について、記者、商人以外軍人の配偶者が二人、退役軍人が一人だが、実際にそれぞれの経歴を検視すると、全員が軍隊と関わりを持っている特徴が見られ、更に軍との関係で台湾へ移住したという背景も共通している。記者であった王氏は、もと海軍の出身者だし、商人の鄧氏も大陸から離れる時は軍人だったのである。さらに鄧氏の妻も軍人家庭の出身であることが作品に記されている。この事実は台湾社会のある側面的現実を示唆している。ようするに、彼らは全て台湾社会のいわゆる「第一世代」の「外省人」（戦後国民党政府と共に大陸から台湾へ移住された人々を呼ぶ）層を代表する存在を意味するのである。この五人の作者同様、台湾社会に第一世代の外省人として生きてきた人々は、台湾の政治、社会多方面の変動の過程と流れにおいて、深く関わっている存在であることは否定できない。この点に関して、ここに二人の台湾作家の作品の描写を借りて説明を加える。

台湾作家の蘇偉貞が作品集《台湾眷村小説選》の序文「眷村的尽頭」（眷村のはて）の内容をみてみたい。

「ある一群の人たちがいる。彼らにはほとんど親戚がないという代わりに多くの隣人を持っている。彼らが親類というのを確認するのは、全て隣人から始まり、彼らの両親は方言の訛りがあり、家の中では父母と方言で話すが、家の外では、近所と学校では各地の方言も話せる。…さらに村を出れば、彼らは国語（標準中国語）、客家語、または福建語を話すのだ。小さいころから、まるで彼らは外国で生活しているようだった。…彼らの本籍欄には、中国大陸の縮小図が描かれているようである——広東、福建、江蘇、安徽、山東、四川、新疆、河南、熱河、河北、北京、上海、南京…だけど彼らは台湾で生まれ育ったのである。…」

台湾作家朱天心の作品《想我眷村的兄弟們》（眷村の兄弟たちを思う）の内容を引用したい。

「…日が暮れて家に帰って晩御飯を待っていたら、ふとみる両親はおかしな行動をしている。

裏庭で冥錢を燃やしているのだ。だが故郷で生き別れた家族の消息が分からないため、誰々へとはっきり語れなく、ただ〇〇の祖先のためだと漠然と言っているようだった。そして燃やしている両親の表情も複雑だ、悲しさ表すのを抑え、故郷に対する記憶だけを覚えているような感じであった。

「そうだ、肉親が死んでいなかったところでは、故郷とは言えないんだ。」

この二つの作品は、共に《台湾眷村小説選》に収録されている。「眷村」と言うのは、上述作品の程氏も「私は眷村に長く住んでいました」と語っているように、台湾社会において特別な住民層を指している。その由来は大陸から台湾へ移住する際、政府から軍人関係者とその家族たちのため用意された住宅区を指している。ここに住む人々は、その構成に特色があるため、台湾社会において、かれらは常に異色的存在と見なされている。その「異色的」という意味は、「探親文学」の作者層が大陸の故郷へ抱く特別な心態によって生じるものと同質であると考えられる。実は台湾社会において、これら作者と同じ族群に属する人が多く占めているのは事実である。また彼らこそ「探親文学」作者層の基盤的存在であるというのは否定できないであろう。蘇偉貞と朱天心の作品に「年節になれば、全ての家々は必ず祖先を祭るのだが、お墓参りをする事は出来ないのだ。」と「そうだ、肉親が死んでいなかったところでは、故郷とは言えないんだ。」と彼ら眷村族群が共通する心境を語ったのであると同時に、探親文学の作者層の心境とも重なるのである。

「眷村族群」は台湾社会においてある特別な住民層であると普通に考えられている。本論は眷村族群について、別の機会で論ずることにするが、ただ「探親文学」作者層と密接に関係していることであり、ある意味では一体化していることが事実であるという点について、「探親文学」の時代的意義を理解するため注目せねばならない重要な鍵である。

ここで帰郷者身分の特徴性から見る問題点についてさらに考えてみたい。上述引用した朱天心の作品に、台湾外省人眷村族群の第2世代の目から見る自分の親たちの行動が描写されている。「冥錢を燃やしている両親の表情が複雑だ」という表現は、まさに探親文学の作者層そのものを指している。故郷にいる親属の生死がはっきり分からないため、誰のために冥錢を燃やしたらいいのか困惑しているのである。彼らにとっては骨肉の情を深く抱きながら、大陸の故郷を思うところは「探親」することによって確認できなければ、戸惑いが一生続くであろう。だがこの心態も彼ら一代限りのものになるはずである。お墓を持たない世代だが、いずれ自分たちが台湾で始めてお墓を立てることにもなるであろう。また彼らのようなお墓がない世代が消え去ると、台湾社会において「探親文学」も歴史の記憶の一片になる。

現在の探親文学作者層の第2世代では、台湾こそが自分たちの生まれ故郷であると考え始めているのも事実である。その理念が現在の台湾社会の主流的思潮になったのも確実である。なぜなら、探親開放政策が実施されてもう20年を経過し、何の心配もなく堂々と探親できるだけではない、政治的に中国大陸と台湾の関係が新たな時代方向へと進展し、探親活動も実質的に自由な交流活動へと変質をみているのである。一時期、盛んに創作された「探親文学」は、歴史の流れのなかであた

かも一瞬のできごとのように、一時代の真実を記録し、重要な時代的意義という使命を担い、同時に今後の台湾社会において、このような「探親文学」という特殊な時代が生んだ特殊な作品は継続をみないまま、新たな進展もないのは必然である。

四 帰郷後作者たちの意識の変化について

五人の作者は身分が異なるため、それぞれの帰郷中、大陸の社会実態をとらえる視点も異なるのは当然であるが、しかし帰郷者が多くの情報を持ち帰った後、中国大陸と台湾双方に影響をもたらしたのも事実である。以下はそれぞれの作者の帰郷に対しての観点を作品の締め括りの部分を取り上げながら考察する。

(1) 作品 の鄧氏は「1949年別れて以来、再会できたのは運がよかったのであろう。だが今後也會えるのかといえ、誰も予想できない。私は弟に言った：「なるようになる、縁があればまた会えるが、でなければ九泉であおう。」とあきらめながら、その後の中国、台湾の政治的関係と展開の可能性を睨んだ心態は、当時台湾社会において、よく現れる想像である。

(2) 作品 の程氏は「帰郷前は家族の夢を見たとき、全て数十年前の顔だったが、帰郷後の夢では家族全員が一気に数十年も年とってしまったようだ。実際自分の人生もはかない夢ではないかと...」と深く感懐しながら、やっと家族と現実的に繋がったと感じたのではないかと受けとれる。

(3) 作品 の林氏は「帰郷ができて、長年の願いがかない、兄弟の無事も確認できた。現在はたまたま香港の友人に手紙を頼んだりして大変満足している。ただし何時になれば私と同様な生活ができるだろうか？ それだけ何も助力できないのだ。」と現実に対して無力感を訴えている。

(4) 作品 の王氏は「6月に台湾に戻ってから3ヶ月たった。...私は政治も語りたくないし、未来を予想することもしない。しかし私は自分の帰郷経験を語ることにした。生きているうちに両足さえ丈夫なら、続けて中国大陸と行き来をしたい。なぜなら両海岸ともに私の故郷であるからだ。...」このように帰郷者は胸にしまっていた心情を明白に表現している。

(5) 作品 の劉氏は「当初意外に帰郷という願いがかない、今安心して台湾で生活している。38年間の生き別れは、人生の半分と同じだ。大陸の自由がない、遅れている生活を見れば、私はもう帰りたくない。」とかなり大陸の実情を批判的な目で見ていたのである。

さまざまな視点、失望、希望が混じった思いを込めて、作者たちは自分の帰郷経験を社会に公開し、多く同経験者に共感をあたえたに違いない。良くも悪くも、政治的な厳しい時期に帰郷が出来たことが彼ら個人の生涯に貴重かつ重要な事件だったように、半世紀の台湾と中国大陸の関係においても同じことが言えると思う。

結 び

これまで「中国時報」に登載された「探親文学」の五作品を取り上げ、さまざまな視点から、これらの作品内容と作者自身もつ特徴性を検討し、台湾社会における重要な位置づけと時代的意義を論じたのである。そもそもこれらの作品に注目したのは、私の近年台湾の眷村文化についての研究と関係するからである。2008年3月、台湾の政局が大きく変動し、政権交代の後、新政権は両海岸間の関係に対して、多くの政策をもって積極的に交流を拡大する方針を打ち出している。「探親文学」が台湾現代文学史において、ひとつのジャンルとして定位された以上、その存在価値を単に作品にあらわれた時代的悲情を感懐し、共感するほか、中国現代史の重要且つ特殊な「歴史事件」であると認識する必要がある。さらに「探親文学」の作者層が歩んだ苦い経験は、こうした中国史における特殊な一ページが繰り返されないためにも、今後の中国と台湾関係の展開に重要な鑑であると考えられる。

主な参考資料

兩岸關係變遷史 張讚合 1996 周知文化出版

臺灣眷村小説選 蘇偉貞 2004 二魚文化事業出版

(本論は筑紫女学園大学2007年から2008年に継続して受けた研究助成費による成果の一部である。この研究は今後も継続される。)

(せき きりん：アジア文化学科 教授)